

義天『圓宗文類』の研究

——四明如吉と高麗義天——

柴崎照和

『圓宗文類』二十二卷（卷第一、卷第十四、卷第二十二が現存）は、華嚴教學に関する要文を項目ごとに類集したものである。『圓宗文類』が編纂されたのは高麗に於いてであるが、本書は宋代仏教の影響下に成立したものである。義天は求法のために入宋し、多くの善知識から受法している。義天が入宋する以前の宋代の仏教界、特に天台において「類集」形式をもつ書物が多く成立している。例えば、義天編纂の『新編諸宗教藏總錄』卷第三には、如吉編『天台文類』十卷（金沢文庫所藏）と継忠録『天台文類口義』十三卷（散佚）とが採録されている。また『圓宗文類』成立以後、宋代の四明山景福寺了宏の門下で俊衍（一一六六～一二二七）の後輩である守一（生没年代不詳）に『律宗會元』三卷の著作がある。これは道宣の律三大部、元照の三大部註等を引証して南山律の宗義を十門に分けて論述した綱要書である。この様に宋代では、宗義の要文を纏めた「類集」の撰述が盛んであった。「類集」

が多く撰述された背景には次の如き要因があった。「新集圓宗文類序」（『大覺國師文集』卷第二）によれば『圓宗文類』二十二卷は、新學の者の勉學のために編纂されたと述べられている。このことから宋代に「文類」が多く編纂されたのも、初学者が宗義を理解する上でその便宜を計るためであった。

一 如吉の事績と著作

如吉（生没年代不詳）に関する資料としては、宋の咸淳五年（一二六九）に成立した志磐撰『仏祖統紀』卷十三（大正四九・二二七中）における記述が唯一のものである。

法師如吉。四明人（割註）二師口義序云。學廣智得其旨。見前輩編類集。初無詮次。於是參以三部之文。節略成類以行於世。嘗注金鐔。言簡而義正。學者宗之。住錢唐因果。

右に引く「二師口義」（『仏祖統紀』卷第二六山家教典志には十五卷とする）は継忠の録であり、二師とは知禮・尚賢で

ある。如吉は四明知禮門下の廣智尚賢について受學し天台の宗旨を得た。錢塘（浙江省臨安府）因果に住し、教えを流布する。著作として『天台諸文類集』十卷、『金鉉註』卷数不明（散佚、上記山家教典志にも言及）がある。後者は湛然『金剛鉉論』に対する註であり、これについて「言は簡にして義は正なり。學者之を宗とす」と述べられていて、その著作は尊重されていたことが知られる。

『重編天台諸文類集』の成立過程については、宗曉（一一五〇～一二二四）『四明尊者教行錄』卷六「記四明門下纂成十類」（大正四六・九一六下）、『仏祖統紀』卷十二、法師自仁（大正四九・二二六上）の記述によると、次の如くである。自仁の師知禮は講義で多くの祖師の文を引用するため、自仁はこれを五類に纏め記録した（これが類集の興りである）。次いで仁岳（？～一〇二四）が二項目を加えて七類とし、更に聰師が十類に鈔した。これに佛慧才師が重新増輯し、如吉が再加して現在見られる様な重編の体裁にした。本書が成立した時期は、これに対する註を書いた繼忠の生没年代が大中祥符五年から元豐五年（一〇二二～一〇八二）迄であり、これを勘案すればこの頃か。なお「類集」が祖師の著作の要点を知るには便利であるが、著作の全体を知る上で障害となるとする批判が、前記『四明尊者教行錄』に記されている。しかし「類集」は後代でも重宝されていたことは、嘉熙三年（一二三九）己亥歲

結制の識語をもつ「古雲法師新學程式」（古雲法師については不明）（金沢文庫資料全書第三卷所収）に、初学者が天台を修學するに当たりどの様な書物から読み始めるかにつき、「先ず四教儀を読み、次いで大小乗の法相を学び、後に十不二門、金鉉、類集、指要、義書、義例を学ぶ」ことが示されている。今列挙した著作は順に上から、諦觀『天台四教儀』、湛然『十不二門』、同『金剛鉉論』、如吉『重編天台諸文類集』、知禮『十不二門指要鈔』、同『四明十義書』、湛然『止観義例』である。

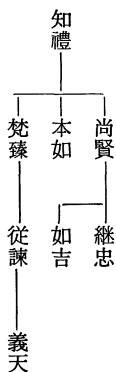
『重編天台諸文類集』十卷（金沢文庫所蔵本は、八卷七冊（二、二、三、五は一部欠、七、八欠）金沢文庫資料全書第三卷に所収）は次の十項目から成っている。一諸文經體類、二諸文經王類、三諸文被接類、四諸文壽量類、五諸文觀法類、六諸文教證類、七諸文隨緣類、八諸文四士類、九諸文二空類、十諸文習氣類である。その内容については、前記如吉の伝に「天台三部の文を以つてす」とある。ここで現存する資料によつてその引用の文献について見てみる。先ず三大部であるが、智顓『法華玄義』に湛然『法華玄義釈籤』が、智顓『法華文句』に湛然『法華經文句記』が、智顓『摩訶止観』に湛然『摩訶止観弘決搜要記』『摩訶止観義例』『摩訶止観輔行伝弘決』『止観大意』が引用されている。その他では、智顓の弟子灌頂『涅槃經玄義』と智顓述湛然再治『涅槃經疏』、智

頤『維摩經玄疏』と智顗述灌頂補『維摩經文疏』湛然『維摩疏記』、智顗『観音經玄義』と知禮『観音玄義記』、智顗『観音經義疏』『請観音經疏』、智顗『金光明經玄義』『金光明經文句』と知禮『金光明文句記』『光明玄義記』（續遺記とも云う）智圓『光明索隱記』（散佚）、智顗『法界次第初門』、智顗説灌頂記『四念處』、智顗『浄土十疑論』（偽作）、湛然『金剛鉤論』、湛然『十不二門』と知禮『十不二門指要鈔』、知禮『観經疏妙宗鈔』、『散集』（未検）である。この外に『華嚴經』『涅槃經』『観仏三昧海經』『占察善惡業報經』や『大乘起信論』等の諸經論が引かれている。以上列挙した引用文献から次のことが言える。先ず三大部では、智顗及び湛然の著作が用いられていること。その他の經の注釈や著作では、智顗、灌頂、湛然、知禮の著作に拠っていることである。しかしここで注目すべきは上記智圓の著作が六度引用されていることである。宋代において天台宗は山外派と山家派に別れて論争が展開されている。第十一祖清竦の門下に志因あり。志因門下に晤恩があり、山外派は晤恩を祖とし、以下源清、洪敏、智圓、慶昭等が輩出する。山家派は知禮の系統を言う。山外・山家派の論争は知禮と山外派の諸師との間の論争が中心であった。『重編天台諸文類集』の編者如吉は山家派の系統に属する。論敵山外派の著作を引く場合、多くは論破する目的のためであるが、『重編天台諸文類集』を見る限りその様な形

跡は見られない。このことは如吉が理長為宗の立場によって本書を編纂したことを示している。この様な立場は、義天の総合仏教主義の立場と相通じるものである。

二 法系から見た義天と如吉との関係

知禮の門流は繁榮し、尚賢、本如、梵臻の三家が特に榮えた。尚賢には十人の弟子があり、この中に『二師口義』『天台文類口義』等の著者繼忠や『天台文類』の著者如吉がいる。また梵臻の弟子に従諫（山家教典志によれば「議方便品題」の著作がある）がおり、その門下の中に義天がいる。以上の記述により、略法系を示せば次の如くである。



〈キーワード〉 義天、如吉、天台諸文類集

（高野山大学非常勤講師）